

3 管内町の沿革

区分 町名	市町村制施行 年 月 日	沿革
日高町	明42. 4. 1 二級町村制施行、門別村とする。 大12. 4. 1 二級町村制施行、右左府村とする。 昭4. 4. 1 一級町村制施行（門別村）。 昭27. 4. 1 町制施行（門別町）。 昭37. 11. 1 町制施行（日高町）。	明13. 3 沙流郡各村戸長役場設置。 明32 平取外8村戸長役場に属する。 明42. 4. 1 二級町村制施行、門別村とする。 大8. 4 右左府村戸長役場設置。 大12. 4. 1 二級町村制施行、右左府村とする。 昭4. 4. 1 一級町村制施行（門別村）。 昭18. 4. 29 右左府村を日高村と改称。 昭27. 4. 1 町制施行（門別町）。 昭37. 11. 1 町制施行（日高町）。 平18. 3. 1 日高町、門別町を廃し、日高町を設置。
平取町	大12. 4. 1 二級町村制施行。 昭21. 5. 1 一級町村制施行。 昭29. 11. 1 町制施行。	明32. 7. 1 平取外8村戸長役場設置。 大8. 4. 1 右左府戸長役場設置。 大12. 4. 1 二級町村制施行、平取村とする。 昭21. 5. 1 一級町村制施行。 昭29. 11. 1 町制施行。
新冠町	大12. 4. 1 二級町村制施行。 昭36. 9. 1 町制施行。	明14 静内、新冠両郡戸長役場設置。 明40. 5. 1 高江村外10戸長役場設置。 大12. 4. 1 二級町村制施行、新冠村とする。 昭36. 9. 1 町制施行。
浦河町	明35. 4 二級町村制施行。 明35. 4. 1 二級町村制施行（荻伏村、西舎村、杵臼村）。 大4. 4. 1 一級町村制施行。	明13 浦河外3村戸長役場設置。 明30 浦河戸長役場設置。 明35. 4 二級町村制施行、浦河村とし、浦河外3村組合役場設置。 明35. 4. 1 二級町村制施行（荻伏村、西舎村、杵臼）。 明43. 4. 1 荻伏村役場分離。 大4. 4. 1 一級町村制施行、浦河村、杵臼村、西舎村を併し、浦河町と称す。 昭31. 9. 30 荻伏村を編入。
様似町	明39. 4. 1 二級町村制施行。 昭27. 4. 1 町制施行。	明13. 3 様似外5村戸長役場設置。 明39. 4. 1 二級町村制施行、様似村とする。 昭27. 4. 1 町制施行。
えりも町	明39. 4. 1 二級町村制施行。 昭34. 1. 1 町制施行。	明13. 2 幌泉外8村戸長役場設置。 明39. 4. 1 二級町村制施行、幌泉村とする。 昭34. 1. 1 町制施行。 昭45. 10. 1 えりも町とする。
新ひだか町	明39. 4. 1 二級町村制施行、三石村とする。 明42. 4. 1 二級町村制施行、静内村とする。 大13. 4 一級町村制施行（静内村）。 昭6. 10. 1 町制施行（静内町）。 昭13. 4 一級町村制施行（三石村）。 昭26. 4. 1 町制施行（三石町）。	明8 三石戸長役場設置。 明13 静内、新冠両郡戸長役場設置。 明39. 4. 1 二級町村制施行、三石村とする。 明42. 4. 1 二級町村制施行、静内村とする。 大13. 4 一級町村制施行（静内村）。 昭6. 10. 1 町制施行（静内町）。 昭13. 4 一級町村制施行（三石村）。 昭26. 4. 1 町制施行（三石町）。 平18. 3. 31 静内町、三石町を廃し、新ひだか町を設置。

4 管内の面積、人口及び世帯数等の状況

区分 町名	面積 (Km ²) (R2. 7. 1) 国土地理院調	人 口 (人)				人口密度 27国調 (人/Km ²)	世 帯 数		
		17国調	22国調	27国調	住民基本台帳 (R2. 1. 1)		22国調	27国調	住民基本台帳 (R2. 1. 1)
日 高 町	992.14	14,730	13,615	12,377	11,919	12.5	6,064	5,784	6,357
平 取 町	743.09	6,173	5,596	5,310	4,923	7.1	2,412	2,369	2,498
新 冠 町	585.81	6,034	5,775	5,596	5,483	9.6	2,388	2,404	2,756
浦 河 町	694.26	15,698	14,389	13,081	12,166	18.8	6,358	6,151	6,673
様 似 町	364.30	5,711	5,114	4,519	4,230	12.4	2,206	2,046	2,169
え り も 町	284.00	5,796	5,413	4,905	4,623	17.3	2,036	1,932	2,128
新ひだか町	1,147.55	27,265	25,419	23,250	22,242	20.3	11,015	10,440	11,652
計	4,811.16	81,407	75,321	69,038	65,586	14.3	32,479	31,126	34,233

区分 町名	産 業 別 就 業 者 27 国 調 (人)												
	総 数	管理的職業 従事者	専門的・ 技術的職業 従事者	事務従事者	販売従事者	サービス 職業従事者	保安職業 従事者	農林漁業 従事者	生産工程 従事者	輸送・機械 運転従事者	建設・採掘 従事者	運搬・清掃・ 包装等従事者	分類不能 の職業
日 高 町	6,591	198	715	879	452	798	198	1,879	433	237	336	455	11
平 取 町	2,842	92	335	378	144	291	37	910	138	141	135	222	19
新 冠 町	2,934	72	269	377	193	335	45	979	249	123	122	161	9
浦 河 町	6,739	249	965	1,229	513	738	133	1,496	389	240	353	431	3
様 似 町	2,325	91	158	341	192	240	40	551	243	121	146	176	26
え り も 町	2,839	57	209	217	147	214	196	1,381	165	43	79	119	12
新ひだか町	11,258	462	1,431	1,613	1,004	1,482	542	2,058	725	464	619	755	103
計	35,528	1,221	4,082	5,034	2,645	4,098	1,191	9,254	2,342	1,369	1,790	2,319	183

※ 住民基本台帳人口・世帯数 は北海道総合政策部地域行政局市町村課調

5 地域指定等の状況

町名 \ 区分	低工	過疎	辺地	自公	山村	農振	特定
日高町		○	○	国定	△	○	△
平取町		○		国定	○	○	○
新冠町		○	○	国定	○	○	○
浦河町	○	○	○	国定	○	○	○
様似町		○		国定	○	○	○
えりも町		○	○	国定	○	○	○
新ひだか町	○	○	○	国定	○	○	○

(注) 1 『低工』～低開発地域工業開発促進法

2 『過疎』～過疎地域自立促進特別措置法

3 『辺地』～辺地に係る公共的施設の総合整備のための財政上の特別措置等に関する法律

4 『自公』～自然公園法

5 『山村』～山村振興法

6 『農振』～農業振興地域の整備に関する法律

7 『特定』～特定農山村地域における農林業等の活性化のための基礎整備の促進に関する法律

※ △は、一部指定の町である（辺地のみ一部指定の町も○と記入している）。

日高町 ひだかちょう



役場所在地 北海道沙流郡日高町門別本町210番地の1
郵便番号 059-2192
電話番号 01456-2-5131
FAX番号 01456-2-5615
ホームページ <http://www.town.hidaka.hokkaido.jp/>

〔町名の由来〕

昭和18年、当時の右左府村から町名変更により、日高山脈の山ふところにある地形にちなみ、日高村とされた。その後、昭和37年に町制施行により「日高町」となり、平成18年の日高町・門別町の合併時においても新町名は「日高町」と決定された。

〔町章の由来〕

平成18年、当時の日高町と門別町の合併時において決定。日高町の頭文字「ひ」をモチーフとし、緑と青色部分は日高町を表し、二つの町が手を取り合い、一つの活力ある町へ飛躍せんと突き進む様を表現している。上部の赤の玉はいきいきと暮らす人々の笑顔や輝く太陽を象徴している。カラーは、広大な大地や山脈、海、清らかな川、せせらぎをイメージしている。

〔地勢〕

本町は、日高管内の西部に位置し、日高地区のある北東から門別地区のある南西に流れる「沙流川」の源流から下流にかけて構成されている。北東部は北海道の屋根といわれる日高山脈がそびえ、周囲を大小の山岳が取り巻いている。南西部はなだらかな地形をなしており、沙流川、門別川、波恵川、慶能舞川、賀張川、厚別川が太平洋にそそいでいる。

町の北側に位置する日高地区は、北海道の内陸気候圏に属しているため寒暖の差が大きく、冬期には1m前後の積雪が見られるが、南側に位置する門別地区は、太平洋に面した海洋性気候のため、積雪も少なく比較的温暖な気候となっており、海岸沿いには、なだらかな起伏が続く地勢を呈している。

町域は、間に平取町を挟んだ両地区間約65kmの飛び地になっている。

〔歴史〕

明治の初期に門別地区に彦根藩の藩主が入植した後、徐々に平取町を経て日高地区への入植が見られるようになった。当時の右左府原野への入植や定住は明治34年以降であった。明治30年頃には、沙流川流域にもかなりの定住者が見られ、明治32年には、門別地区から日高地区にかけて統括する平取町外8カ村戸長役場が置かれるまでとなった。開墾から農作物の栽培が行われ、畑作と稲作が発展したほか、日高地区では林業と製材事業が行われてきた。門別地区では、現在の軽種馬産業へと繋がる馬産、水産業が定着した。

〔町政のあゆみ〕

【旧日高町】

大正 8年 右左府村戸長役場設置
大正12年 二級町村制施行、右左府村とする
昭和18年 右左府村を日高村と改称
昭和37年 町制施行(日高町)、役場庁舎移転
昭和39年 日高公民館完成、産業会館完成、消防団設置
昭和41年 ゴミ焼却場完成
昭和43年 町営プール完成、母子センター完成
昭和44年 町営スケートリンク完成
昭和46年 母と子の家完成、第1回樹魂まつり開催
昭和47年 町制施行10周年記念式典開催、日高国際スキー場開設
昭和48年 日高町歯科診療所開設、沙流川温泉開発
昭和50年 町民憲章制定、町営バス運行開始
昭和54年 沙流川キャンプ場完成
昭和57年 給食センター業務開始
昭和57年 山村開発センター完成、図書館・郷土資料館完成
昭和59年 日高町総合体育館完成、武道館完成
昭和62年 日高町市街地整備・観光開発計画策定
昭和63年 沙流川展望館完成
平成11年 日高山脈館完成
平成17年 開基100年記念式典開催

【旧門別町】

明治42年 二級町村制施行、門別村とする
昭和 4年 一級町村制施行(門別村)
昭和27年 町制施行(門別町)
昭和36年 富川公会堂完成
昭和37年 厚賀町民会館完成
昭和38年 門別中央公民館完成
昭和41年 第1回ししやも祭り開催、町立病院改築
昭和43年 町章・町旗制定
昭和47年 町制施行100年、町民憲章制定、門別町総合振興計画策定
昭和50年 役場新庁舎完成
昭和52年 特別養護老人ホーム完成
昭和53年 門別総合町民センター完成
昭和54年 スポーツセンター完成
昭和59年 とみかわ児童館完成
昭和61年 門別山村研修センター完成
平成元年 厚賀スポーツホール完成、町民スケートリンク完成
平成 2年 日高門別駅に町民サロン室併設
平成 4年 開基120年、町制施行40年

【合併後の日高町】

平成18年	旧日高町と旧門別町が合併、新町「日高町」となる、日高自動車道 日高富川IC開通
平成19年	新しい町民憲章、町花(サクラソウ)、町木(カシワ)を制定
平成20年	日高町総合振興計画策定、ふるさと日高応援寄附金(ふるさと納税)開始
平成21年	門別競馬の全開催がナイトーに(グランシャリオナイトー)
平成23年	高齢者生活支援ハウス「日高せせらぎ荘」開所
平成24年	日高自動車道 日高門別IC開通、門別競馬場「ゲストルーム(来賓室)」完成
平成27年	日高高等学校が新校舎に移転、富川東防災広場の新設、「飯田家住宅主屋」登録有形文化財に登録
平成28年	日高町合併10周年記念事業、日高町生きる力を育む早寝早起き朝ごはん運動の推進に関する条例施行
平成29年	富川国民健康保険診療所開設、防災行政無線デジタル化
平成30年	日高自動車道 日高厚賀IC開通、日高国民健康保険診療所移転、門別わかば保育所及びももんべつ児童館新築、第2次日高町総合振興計画策定

〔行政施策の重点事項〕

○町民と行政との協働によるまちづくり

今日の行政を取り巻く環境は、少子高齢化や厳しい財政状況等大きく変化しています。地域の公共的課題の解決を行政だけで行うのではなく、町民と行政が適切に役割分担しながら、協働の体制でまちづくりを進めていく必要があります。これまで培われてきた町民と行政の密接間関係を崩すことなく、それぞれの役割分担を模索し、新たな町民参画のまちづくりを進めます。

○地域の特性を活かしたまちづくり

本町は、太平洋に面した門別地区と山間部に位置する日高地区で構成されており、気候や産業など地域の特性は異なるものの、いずれも豊かな自然を有しています。新千歳空港や苫小牧港に近いという地理的な優位性や日本有数の飼養頭数を誇る軽種馬など、地域資源も豊富にあり、その特性を活かしたまちづくりを進めます。

○自助と自立によるまちづくり

地方分権社会において、今後も本町が持つ潜在能力を十分に発揮して、自己決定・自己責任の原則の観点からまちづくりを進めていかなければなりません。また、各種施策に必要な経費は原則としてできるだけ地域独自の財源でまかなうことを念頭に置き、自助と自立の精神に基づいた独自のまちづくりを進めます。

〔文化・観光〕

【日高地区】

○ひだか樹魂まつり

昔から日高山脈に棲むという伝説の竜を守護神として、森の樹木に感謝を捧げ、竜により守られてきた山々の樹木の魂は、「樹魂まつり」として受け継がれてきた。

日高地区は森の町。かつては木を倒し、搬出し、市場に出すことで生計を立てていた。木と共に栄えてきた日高には、想像を絶するような厳しい仕事があり、機械がまったくない時代、大きな木を倒し搬出する為には、人間の力と技と、そして作業の呼吸をあわせることが重要であった。「木遣り」と呼ばれる当時の木の搬出方法を前夜祭中に再現している。

会場の目の前を流れる沙流川の河川敷から打ち上げられる花火が夜空に花を咲かせる前夜祭と、丸太早切りの「木こりさん競争」、丸太運搬の「流送(りゅうそう)レース」など川と森の町ならではの参加型イベントが開催される本祭で構成され、毎年7月の第4土曜・日曜に開催される。

【門別地区】

○門別ししゃも祭り

秋に沙流川を遡上するししゃもを店頭で干す風景が風物詩となっている。10月最終日曜日に開催される門別ししゃも祭りは町内最大のイベントで、町内外から1万人以上の来場者がある。

○門別競馬場

軽種馬生産が盛んな門別地区では、シンボリルドルフやキタサンブラックをはじめ数々の名馬を輩出している。ホッカイドウ競馬門別競馬場では毎年4月から11月までサラブレッドたちの熱い走りを見ることができる。

〔産業・経済〕

○農業

門別地区は、日高地方ではじめて稲作を成功させた地で、現在でも米どころとして知られている。一方でトマトや軟白ネギ、ほうれん草、ピーマンなどは主要産品として生産が確立し、市場へと安定供給されている。近年では、イチゴやアスパラガスなどの生産量も増加している。また、酪農・畜産については、特に肉牛において、優良な繁殖素牛の導入による資質の改良に努めている。

○水産業

さけ・ますや日高昆布を筆頭に、カレイ、ホッケ、タコなどが水揚げされる。また、さけ・ますの稚魚やホッキ稚貝の放流、昆布礁の設営といった水産資源の維持管理型の漁業を推進しており、特産品のシシャモについても孵化放流事業を実施している。日高地区では、山女魚やニジマスの養殖が行われている。

○商工業

農産物や水産物を用いた食品製造業が最も多く、乳製品、食肉加工品をはじめ、様々な製品が造られている。これらの多くは地元の商店でも販売され、地域の特徴をアピールしている。また、魅力ある商店街づくりの一環として、道の駅や温泉などと連携し、イベントなどを通じて活性化を図っている。

〔主な公共施設〕

日高町民センター、門別総合町民センター、富川東防災広場、児童館、図書館郷土資料館、日高山脈博物館、多目的集会施設、山村研修センター、総合体育館、スポーツホール、研修所、町民プール、野球場、テニスコート、スキー場、パークゴルフ場、サッカー場、スケートリンク、総合交流促進施設、農園、キャンプ場、セカンドハウス、健康増進センター(温泉施設)、多目的グラウンド、集会施設、歯科診療所、病院・診療所、老人福祉センター、老人保健施設、小学校(4)、中学校(4)、高校(1)

平 取 町 びらとりちょう



役 場 所 在 地 北海道沙流郡平取町本町28番地
郵 便 番 号 055-0192
電 話 番 号 01457-2-2221
F A X 番 号 01457-2-2277
ホ ー ム ペ ー ジ <http://www2.town.biratori.hokkaido.jp/biratori/>

〔町名の由来〕

町名平取はアイヌ語「ピラウトル」(ガケの間にある所)から出たもの

〔町章の由来〕

外郭は「平」の字の形象化で、平和の国日本、平和の町平取を表徴し、円満な表現を以て、国のしるし、日の丸の輝く日輪を抱く。

星をいただく「はと」は、平和の象徴で、つばさを張つて静かに平和の理想と飛躍の意を示すと共に「鳥」の語感から「びらとり」の「とり」を暗示する。

上天の星は、鎮守の森高く冴えて希望に輝く北斗の表徴で、飾る「ササリンドウ」は鎮守義経神社の紋章に因み知仁勇三徳を表徴する。

〔地勢〕

平取町は日高振興局管内の西端に位置し、総面積743.09㎡で東西52.8km、南北41.1kmとやや三角形に似た町です。

〔歴史〕

明治13年門別ほか17村戸長役場の管轄に属し、同32年これから分離して平取ほか8ヶ村戸長役場を設置。

大正8年9村のうち、幌去村の一部を右左府村戸長役場(旧日高町)として分離。

同12年4月平取ほか8ヶ村戸長役場の区域をもって二級町村制施行、村名を平取村とした。

昭和29年11月に町制施行以来、平成11年には開町100周年をむかえた。

現在では、第6次総合計画に基づき「みんなでつくる、未来へつなぐ。あふれる笑顔、びらとり」をテーマに施策が推進されている。

〔町政のあゆみ〕

明治32年	門別戸長役場から平取外8ヶ村戸長役場が分置	平成 8年	貫気別診療所完成
大正10年	沙流軌道開通		野菜予冷貯蔵施設完成
大正12年	二級町村制が布かれ、平取村と改称	平成11年	開町100周年をむかえる
昭和 3年	日進バスが平取～荷負間の営業開始		すずらんの里ニュータウン造成完了
昭和 6年	平取～日高村間沙流右岸道路完成	平成12年	ふれあいセンターびらとりオープン
昭和 7年	平取～日高村間定期乗合自動車運行開始		ニセウ・エコランドオープン
昭和19年	役場振内支所設置	平成13年	平取バイパス供用開始
昭和21年	役場貫気別支所設置	平成16年	ケアハウスすずかオープン
昭和24年	開村50周年をむかえる	平成17年	国際環境規格ISO14001の認証取得
昭和29年	町村制施行により平取町となる	平成18年	第5次総合計画スタート
昭和40年	役場庁舎改築工事竣工		トマト選果場完成
昭和44年	開町70周年をむかえる	平成19年	山の駅ほろしり館オープン
昭和54年	平取町中央公民館竣工		沙流川流域が国重要文化的景観に選定される
昭和61年	二風谷観光公園オープン	平成20年	自治基本条例制定
昭和62年	振内鉄道記念館完成	平成22年	平取町アイヌ文化情報センター竣工
平成元年	平取カーリング場完成	平成24年	有害獣侵入防止柵整備
平成 3年	二風谷アイヌ文化博物館オープン	平成25年	こころのホームふれない開所
平成 4年	野菜集出荷施設完成	平成26年	びらとり温泉ゆからオープン
平成 7年	学校給食開始	平成28年	第6次総合計画スタート
		令和元年	アイヌ工芸伝承館「ウレシバ」オープン
			二風谷コタンオープン
			平取町国民健康保険病院改築

〔行政施策の重点事項〕

○歴史風土や文化を愛する心豊かな人づくり

他人や自然をおもいやる心と、ふるさとの歴史や文化を愛する心を育む教育を積極的に推進し、将来のまちを担う人材の育成に努め、さらに生活を豊かにする文化活動や伝統文化の保存伝承を推進する体制を整え、文化の香り高いまちづくりをめざします。

・生涯を通じ生きがいと元気にあふれるまちづくり

町民ひとり一人がお互いの個性や自立する心を尊重しながら、子どもからお年寄りまで安心していきいきと健康に暮らせるまちづくりをめざします。

・平取町の資源を活かし、生産の喜びと活力に充ちたまちづくり

地元の資源を最大限に活用し、育んだ「びらとりブランド」をさらに新たな可能性を見いだすとともに、農業、商業、工業等が機能的に結びつくことができるしくみづくりを確立します。

・自然と共生し、快適で安全な暮らしづくり

人と自然が共生できる循環型・環境負荷低減型の地域の形成をめざすとともに、町民生活の安全性、利便性、快適性を高め暮らしやすいまちをつくります。

・人と人とのつながりを大切にし、魅力的で個性あふれるまちづくり

誰もが平等に参加の機会やまちの情報を手にて、互いに助け合いながらまちづくりについて自ら考え、行動することのできる土壌を築き育てるとともに、平取町に住む私たち自身が平取町の将来を考え、よりよい暮らしを実現することをめざします。

〔文化・観光〕

幌尻岳を仰ぎ、まちの中心を清流・沙流川が流れる自然豊かなまち、平取町では、多彩な魅力に出会うことができます。

まずユウカラの里の中心地の二風谷地区には、独特のアイヌ伝統文化を目の当たりにできる「二風谷アイヌ文化博物館」や「萱野茂二風谷アイヌ資料館」、「マンロー博士記念館」のほか、「沙流川歴史館」があり、地域の歴史文化、自然などを学ぶことができます。

また、個性的な伝承文化を伝えている「義経神社」や「義経資料館」では、ひと味違った歴史ロマンを楽しめます。

このほか、「芽生すずらん群生地」、「二風谷ファミリーランド」、「ニセウエコランド」といったアウトドアフィールドや「びらとり温泉」など、さまざまな個性がまちに広がっています。

〔産業・経済〕

○農業 冷涼な気候を活かした平取トマトは全国有数の産地を形成しており、そのブランド名は「ニシパの恋人」として親しまれています。また、「びらとり和牛」は、平取町の凍てつく冬の寒さを乗り越える事によつて、

肉の旨味が凝縮され、味の濃い美味しい牛肉として幅広い方々に愛されています。このほか、キュウリ、メロン、かぼちゃ、生乳など幅広い農畜産物が生産されています。

○林業 長期的な視点に立ち、地域特性に応じた森林づくりを計画的にすすめるとともに、地材地消を推進し、森林資源の循環利用を図ります。

○商工業 町内各商店街の連携を深め、高齢化や消費者ニーズの多様化に適応する個性的で魅力的な商店づくりを進めます。また、地域資源を活用した付加価値の高い製品やサービスの提供を図ります。

〔主な公共施設〕

ふれあいセンターびらとり、アイヌ文化博物館、沙流川歴史館、山の駅ほろしり館、児童館、子ども発達支援センター、ケアハウスすずか、地域包括支援センター、こころのホームふれない、中央公民館、町民体育館、振内青少年会館、貫気別町民センター、各地区生活館、町営牧野、びらとり温泉、二風谷ファミリーランド、ニセウエコランド、義経資料館、振内鉄道記念館、小学校(5)、中学校(2)

新冠町 にいっかつちょう



役場所在地 北海道新冠郡新冠町字北星町3番地の2
 郵便番号 059-2492
 電話番号 0146-47-2111
 F A X 番号 0146-47-2600
 ホームページ <http://www.niikappu.jp>

〔町名の由来〕

この地は、はじめ「ピポク」(岩の陰)の名で呼ばれていましたが、文化6年「ニカプ」(楡)に改められ、これに新冠の文字を当てて地名となりました。この地に住むアイヌが「ニカプ」(楡)の皮で作った着物を着ていて、その色が茶褐色を帯びた特有のものであったからだといえます。

〔町章の由来〕

開拓具、馬の蹄、船の錨、王冠、北のイメージを現代的に表現し、力強く躍進する新冠町の未来を象徴したものです。開拓具は開拓者精神を、馬の蹄は馬産地王国を、船の錨は海の幸、王冠は新冠の「かんむり」を表し、これらを4個組み合わせることで北海道の「北」を形作り、町民の平和と団結、先端の鋭針は限りなく躍進する新冠町を表現しています。

〔地勢〕

新冠町は、北海道の南部、日高振興局管内のほぼ中央に位置し、東側は新ひだか町と丘陵性大地によって接し、西側は厚別川を境界に日高町と接しています。北側は「日高山脈襟裳国定公園」の主峰、幌尻岳(2,025m)を擁する日高山脈を境界として十勝総合振興局に連なり、南側は太平洋に面し全体として、北東から南西にのびる帯状の行政区域となっており、面積は585.81㎡でその約75%を山林が占めています。

〔歴史〕

新冠は、先史時代から人が住んでいた場所で、やがてアイヌ民族が集落を形成して生活をするようになる。江戸時代になると、松前藩によって新冠場所が設置され、武士とアイヌ民族による交易が行われたという。明治時代には、開拓使が軍馬を育成する場所として新冠の地を選び、新冠御料牧場として戦後まで利用されることとなる。その間、本州からの移住者も多くなり、明治14年には戸長役場が設置された。これが新冠開町の年となる。戦後になると御料牧場が解放され、戦後開拓者が多く移住し現在の新冠の基盤ができる。

平成時代はレ・コード館やレ・コードの湯が建設され、レ・コードと音楽による町づくりを標榜する特色ある取り組みを行っている。

〔町政のあゆみ〕

明治14年	新冠郡高江村外10カ村戸長役場が高江(現新冠市街地)に設置される。	昭和2年	役場庁舎新築。
明治18年	日新小学校(現新冠小学校)が設置される。	昭和20年	美宇国民学校高等科併置、新冠青年学校閉鎖。
明治44年	日新小学校比宇特別教授場が設置される。	昭和22年	新冠中学校が日新小学校に併置される。
大正8年	比宇特別教授場が独立して比宇尋常小学校(現在の美宇小学校)となる。	昭和22年	太陽、大狩部小学校が認可される。
大正8年	新冠尋常小学校滑若特別教授場が設置される。	昭和22年	節婦小学校校舎新築落成。
大正9年	元神部特別教授場が独立して元神部尋常小学校(現在の東川小学校)となる。	昭和25年	明和小学校を設置。
大正12年	2級町村制が施行され新冠村と改称される。	昭和26年	高江駅を新冠駅と改称。役場庁舎改築。
大正15年	日高拓殖鉄道株式会社厚賀、静内間開通し、高江、節婦両駅が設置される。	昭和27年	十勝沖地震により、わが国最大といわれる高江の泥火山群ができ、のちに天然記念物に指定される。
大正15年	日新尋常小学校付属節婦特別教授場が設置される。		

昭和34年	役場庁舎全焼し鉄筋コンクリートによる庁舎建設。	平成 2年	太陽・美宇小学校校舎新築。
昭和41年	日高判官館青年の家が完成。	平成 3年	節婦老人憩の家オープン。
昭和42年	元神部町有牧野育成牛舎が完成。	平成 7年	新冠町デイサービスセンターがオープン。
昭和43年	「新冠泥火山」が北海道文化財天然記念物の指定を受ける。	平成 8年	西泊津で日高管内初の温泉が湧出。
昭和43年	町章・町旗が決まる。	平成 9年	レ・コード館、道の駅オープン。
昭和45年	東川、美宇、太陽中学校の3校が厚賀中学校に統合。	平成10年	新冠温泉レ・コードの湯がオープン。
昭和46年	町民スポーツセンター新築。	平成11年	新冠温泉宿泊施設完成。
昭和51年	町民憲章の制定。町花(ツツジ)町木(ヒガツラ)の制定。	平成11年	高齢者共同生活施設開所式。
昭和51年	町民センター落成。	平成11年	役場新庁舎完成、3月から執務開始。
昭和52年	新冠小学校新校舎落成。	平成15年	新冠町子育て支援センター「なかよし館」がオープン。
昭和55年	郷土資料館新築。	平成20年	東川・美宇・太陽・若園・明和小学校が朝日小認定こども園ド・レ・ミが開園。
昭和56年	判官館森林公園の開設。	平成23年	
昭和56年	老人憩の家建設。		
昭和56年	保健センター建設。		
昭和58年	特別養護老人ホーム「恵寿荘」開設。		
昭和62年	屋内ゲートボール場新築。		
昭和62年	明和小学校新築。		

〔行政施策の重点事項〕

○健康で安心して暮らせるまちづくり

- ・福祉の充実
- ・健康の維持増進

○潤いある環境を創出するまちづくり

- ・自然環境の保全
- ・環境・衛生の向上

○快適で暮らしやすいまちづくり

- ・社会基盤の向上
- ・利便性の向上

○安全で安心して暮らせるまちづくり

- ・安全の確保
- ・安心の確保

○力強く安定した産業のづくり

- ・農業の振興
- ・林業の振興
- ・水産業の振興
- ・商・工業の振興
- ・観光の振興
- ・雇用環境の充実

○学校・家庭・地域社会が一体となった人づくり

- ・幼・小・中教育の充実
- ・生涯教育の充実

○自立したまちづくり

- ・協働のまちづくり
- ・確かな行財政の確立

〔文化・観光〕

○レ・コード館

1997年に建てられたレ・コード館の館内には、最大60万枚以上のレコードが安全に収蔵する専用バンク、レコードデータベース検索、摩耗のないレーザー・ターンテーブルなど、最良の状態で鑑賞することができる機器が整っています。音楽コレクションも数多く展示し、レコードの歴史博物館として機能するほか、多目的ホールや図書室などの機能も有し、町民の文化・生活活動の拠点としても活用されています。

○歴史と文化遺産の継承

町内には、北海道指定の天然記念物である「新冠泥火山」をはじめ、埋蔵文化財として43カ所の遺跡が確認されるなど貴重な文化遺産があります。また、新冠町民俗文化保存会や新冠判官太鼓保存会などが中心となって郷土芸能・伝統技術を保護・継承しています。

〔産業・経済〕

○農業

主な作目は、酪農、畜産、稲作と、本町の農業生産は多岐にわたっています。近年は、そ菜・肉牛生産が伸びており、そ菜では特にピーマンが全道有数の生産地となり、アスパラ、かぼちゃも市場性が高まっています。また、肉牛は黒毛和種の生産が軌道に乗り、「新冠素牛」のブランド化を目指しているところです。

○軽種馬

軽種馬生産では、トップクラスの名馬を中央及び地方に送り出している新冠町。地方競馬の活性化対策や、草地更新など農地整備なども促進し、強い馬づくりへの対策に取り組んでいます。

○漁業・林業

新冠の漁業は、サケ、タコ、カレイ、ナマコ、ツブガイ、コンブ、ホッキ貝などで、沿岸漁業が主体です。また、天然資源を守るために、タコの増殖やマツカワ、ホッキ貝の種苗放流など、資源管理型漁業とつくり育てる漁業にも力を入れるなど、当町の漁業は規模は小さいながらも、魚種は豊富で季節の味覚は観光客に好評です。

総面積の約8割が森林の新冠の林業は、カラマツ、トドマツを主体とする人工林が成熟期を迎え、製材や合板加工等への利用を図るとともに、長期的な視野に立った保全と育成を進めていきます。

○商工業

海から、台地からの豊かな恵みが、新冠らしいふるさとの味覚に生まれ変わります。工業は、地場製品の加工が中心。特に水産加工業が伸びています。商品はお土産としても人気があり、町内の商店や道の駅でも販売されています。また、商業は町民の毎日の暮らしに密着した魅力ある商環境づくりを進めています。

〔主な公共施設〕

新冠町立国民健康保険診療所、町民センター、スポーツセンター、郷土資料館、レ・コード館
特別養護老人ホーム「恵寿荘」、デイサービスセンター、保健センター、日高判官館青年の家
新冠老人憩いの家、節婦老人憩いの家、町有牧野、小学校(2)、中学校(1)

浦河町 うらかわちょう



役場所所在地	北海道浦河郡浦河町築地1丁目3番1号
郵便番号	057-8511
電話番号	0146-22-2311
FAX番号	0146-22-1240
ホームページ	http://www.town.urakawa.hokkaido.jp

〔町名の由来〕

浦河とは、アイヌ語の「ウララベツ」(霧深き川の意味)から転じたもので、江戸時代に松前氏が蝦夷地統治のはじめ元浦川の下流に会所を置いたのに由来している。

〔町章の由来〕

明治35年、浦河に2級町村制が施行され、浦河町外3カ村(浦河、西舎、杵臼、荻伏)組合役場が設置されたことから、4町村の円満協調を象徴し、カタカナの「ウラ」の文字4つを外円とし、中央に漢字の「河」をおさめたものである。大正9年の浦河漁港起工式に使われたのがはじめて、昭和42年6月正規に町章として制定された。

〔地勢〕

当町は、北海道日高振興局管内の南部に位置し、札幌市から約180km、帯広市から約150km、えりも岬から50km地点にあり、東は様似町、西は新ひだか町、北は日高山脈、南は太平洋に接している。

町の地形は、大部分を日高山脈とその前山が占めており、丘陵地を縦断して太平洋に注ぐ河川流域にいくつかの平野がみられ、地質は、河川流域を除き火山灰と泥岩、重粘土などの特殊土壌が、耕地面積の多くを占めている。

山岳は、神威岳(標高1,600メートル)、楽古岳(標高1,472メートル)などがあり「日高山脈襟裳国定公園」の一角を占めている。町の総面積は、694.26平方キロメートルでその81%を山林が占めている。

海洋性気候の影響で夏は涼しく、冬は温暖なため「北海道の湘南地方」とも呼ばれ、豊かで住みよい自然環境に恵まれている。

町内には約300の牧場(生産・育成)があり、4,000頭以上のサラブレッドが駆け回っている。

豊かな太平洋がもたらす海洋資源は豊富で、なかでも良質のダシ昆布「日高昆布」やサケ・マス、夏から秋にかけてのスルメイカは特産品となっている。

〔歴史〕

「うらかわ」という地名は、アイヌ語の「ウララベツ」(霧深き川の意味)から転訛したとも伝えられ、江戸時代に松前藩が幕府に献上した『元禄御国絵図』にもすでに「浦川」として記されている。

当時は、元浦川河口付近(現在の荻伏市街地)が浦川と呼ばれ、松前藩によって浦川場所(会所)が設けられており、主として漁業による交易が行われていた。

明治35年、2級町村制施行により、浦河町、西舎村、杵臼村、荻伏村の浦河町外3カ村組合となり、浦河に組合役場を設けたが、明治43年に荻伏村が分離独立して浦河町外2カ村組合となり、大正4年には、1級町村制施行により、浦河町、西舎村、杵臼村の3町村を合併して浦河町となった。

昭和に入っても、浦河港の完成や鉄道の開通に伴い、日高における浦河の役割は重要性を増し、水道の設置や浦河実践女学校(浦河高校の前身)の設立、日赤浦河療院(現在の浦河赤十字病院)の開院など生活環境も向上した。戦後の復興も農林水産業を中心に順調に進み、昭和31年には、荻伏村との合併により現在の浦河町となっている。

〔町政のあゆみ〕

明治35年	二級町村制施行、浦河村外三か村組合役場設置	昭和56年	農林漁業体験実習館「ピスカリ館」開館
明治40年	馬政局主管日高種馬牧場が西舎に設置		浦河町民憲章制定
大正 4年	浦河に一級町村制を施行、西舎、杵臼を合併して浦河町と改称	昭和58年	日高東部消防組合新庁舎完成
大正 8年	浦河支庁庁舎が新設		基幹集落センター・荻伏会館完成
昭和 7年	浦河支庁を日高支庁と改称		防災非常警報装置開局
昭和10年	浦河小学校新校舎完成	昭和60年	浦河高等学校新校舎完成
	国鉄日高本線が浦河まで開通	昭和63年	浦河町役場・保健センター新庁舎完成
昭和12年	浦河・様似間の鉄道が開通		「丘と海のまきば浦河町(第2次)町づくり計画」ができる
昭和14年	日本赤十字浦河病院開院		
昭和21年	日高種馬牧場が日高種畜牧場と改称	平成元年	国体馬術競技が浦河で開催
昭和22年	浦河簡易裁判所設置・札幌地方裁判所浦河支部設置		柏陽館完成
	浦河第一中学校・浦河第二中学校・荻伏中学校創立	平成 2年	町民プール完成
昭和29年	浦河町役場庁舎落成記念及び町政施行40周年式典	平成 3年	生涯学習センター完成
昭和31年	町村合併促進法にもとづき荻伏村を編入合併	平成 5年	「浦河百話」出版
昭和40年	養護施設老人ホームちのみ荘開所		農水省日高種畜牧場閉場
	浦河町章制定		乗馬公園オープン
昭和44年	浦河福祉センター完成	平成 8年	JRA軽種馬育成調教センター開場
昭和50年	浦河東、杵臼、上杵臼の4小学校が閉校・統合し浦河東部小学校となる		浦河町総合文化会館・図書館落成記念式
昭和53年	基幹集落センター堺町会館完成	平成10年	町制施行80周年記念式典
	町づくり計画「丘と海のまきば浦河町」ができる	平成11年	うらかわ優駿ビレッジアエル落成記念式
昭和54年	特別養護老人ホーム開所	平成20年	クリーンプラザ稼働
昭和55年	馬事資料館開館	平成24年	浦河町立堺町小学校校舎改築
	勤労青少年ホーム完成	平成27年	町立荻伏診療所新築
		平成30年	町制施行100周年記念式典
			浦河町まちなか元気ステーションオープン
		平成31年	子育て支援住宅(西幌別地区)完成
		令和 2年	子育て支援住宅(荻伏地区)完成
			堺町川沿団地建て替え完成
			木質バイオマスエネルギーセンター完成

〔行政施策の重点事項〕

浦河町の将来像や町づくりの指針を定めた「第7次浦河町総合計画」は平成29年に策定され、基本テーマを「想いを 誇りを 魅力を「つなぐ」未来へ だれもが いきいきと 輝けるまち 浦河」と定め、5つの施策を柱に①元気な町づくりのための人口減少対策 ②町民の生命と財産を守る防災対策 を重点推進事項とし、すべての町民が誇りと生きがいを持ち、幸せに住み続けられるよう、町民と協働で未来に夢を紡ぐ町づくりを目指す。

- 郷土愛に満ちた人を育てるまちづくり
- 健やかに暮らせるまちづくり
- 力を生み出すまちづくり
- 快適な暮らしを支えるまちづくり
- みんなで作るまちづくり

〔文化・観光〕

○優駿の里 浦河桜まつり(5月中旬)

西舎の桜並木が満開になる時期に合わせて開催。歌謡ショーやゲーム、桜並木のライトアップなど楽しい催しが繰り広げられる。

○うらかわ夏いちごの日(7月15日)

浦河町の新ブランド作物「夏いちご」は、高い品質と生産量が評価され生産地として注目されています。この「夏いちご」をより一層盛り上げるため、毎年7月15日を「うらかわ夏いちごの日」と定め、この記念日にちなんだ、「いちご」づくしのイベントを行なっています。なお「うらかわ夏いちごの日」は、「(一社)日本記念日協会」から正式に記念日として認定登録されています。

○うらかわ馬フェスタ(7月最終土・日曜日)

JRA日高育成牧場内特設会場で行われる、サラブレッドをテーマにしたイベント。馬上結婚式、牧場主や従業員たちによって行われる草競馬などが楽しめる。

○浦河港まつり(8月中旬)

浦河港を舞台に繰り広げられる浦河町最大のイベント。漁船の豪快な海上パレードや花火大会をはじめ見所盛り沢山。

○産業まつり(9月最終日曜日)

役場正面駐車場を会場に、浦河で生産された農水産物などの特産品の即売会をはじめ、浦河産のイチゴ、和牛など美味しいものがいっぱい。そのほかにも迫力満点の鮭のつかみ取り、野菜の詰め放題、もちまきなどのイベントも実施しています。

〔産業・経済〕

当町は、農業と漁業が基幹産業で、第一次産業に力をいれている。農業は、生産から調教育成まで行われる軽種馬産業が中心となっており、日本有数の競走馬生産地である。(約300の牧場がある)近年は、夏秋いちごの生産、また、施設園芸や肉牛など新たな農業への挑戦も始まっているところであり、また、担い手確保のため新規就農支援にも取り組んでいる。

漁業では、日高昆布・鮭・スケソウダラ・イカ等豊富な水産物の水揚げがあり、水産物を利用した加工品の製造も行われている。また、漁業の分野においても新規就漁支援に取り組んでいる。

〔主な公共施設〕

総合文化会館、生涯学習センター、町民プール、ファミリースポーツセンター、クリーンプラザ、乗馬公園、図書館、郷土博物館、基幹集落センター、ふれあい会館、小学校(4)、中学校(3)、保育所(3)

様似町 さまにちょう



役場所在地	北海道様似郡様似町大通1丁目21番地
郵便番号	058-8501
電話番号	0146-36-2111
FAX番号	0146-36-2662
ホームページ	http://www.hokkai.or.jp/samani/

〔町名の由来〕

アイヌ語に由来すると考えられており、①サンマウニ…寄り木の多いところ、②エサマニ…カワウソのいるところ、③エサマン・ペツ…カワウソ・川、等の説があるが、定かではない。

〔町章の由来〕

太平洋に突き出た様似発祥の地エンルム岬、この岬を中心として、東に大港、西に小港を抱く姿をかたどり、さらには、本町の産業も漁業と農林業の二面からなり、共に相抱く平和の姿を表現したものの。

〔地勢〕

背面に日高山脈、前面は太平洋を臨み、ほとんどが丘陵・山地帯。様似川、海辺川の下流域に小さな平野が広がり、海岸沿いに市街地が形成されている。

〔歴史〕

様似に古くからアイヌ民族が住んでいたことは、チャシ跡などの遺跡からうかがうことができる。

町の開発のきっかけは、1935年(寛永12年)頃に始まる、幕府による金鉱山開発であった。

1798年(寛政10年)、幕府は、交易や行政など地域を管理する役割を担う「シャマニ会所」を設置した。

1799年(寛政11年)、ロシアの南下など諸外国の脅威に備えるため、蝦夷地の道路整備が必要とされ、断崖絶壁の海岸を迂回する道内最初の官営道路「様似山道」が、幕府によって開削された。

1806年(文化3年)幕府は、増えてきた蝦夷地の住民の、心のよりどころとなる寺を作ろうと、様似に蝦夷三官寺のひとつ、等湫院を完成させた。

天然の良港を持つ様似は、本州と北海道・千島列島をつなぐ航路の途中に位置する重要な拠点とされ、昆布など豊かな海産資源を目当てに住民が増え、幕末の時代背景と深くかかわりながら発展してきた。

〔町政のあゆみ〕

享和 2年	様似が蝦夷奉行の官下となる (この年を様似の開基とした)	昭和61年	役場庁舎・保健センター完成
文化 3年	幕府が蝦夷三官寺のひとつ等澗院を建立	昭和63年	生涯スポーツ種目「テニポン」誕生
明治13年	様似郡各村戸長役場を開設	平成元年	韓国馬山(マサン)市、城湖(ソソホ)国民 学校と様似小学校姉妹提携
明治21年	公立様似簡易小学校開校		日高幌別さけ・ますふ化場完成、様似 軽種馬共同育成センター完成
明治39年	2級町村制施行、様似郡は1郡1村となる	平成 4年	町立様似図書館完成
大正 7年	村の紋章制定	平成 6年	町立おおぞら保育園完成
大正10年	アポイ岳の高山植物が国の天然記念物 に指定	平成 7年	新潟県味方村と友好姉妹町村締結
昭和21年	5月1日普通村に昇格		東様似生活館完成、ふれあい広場完成
昭和22年	様似中学校開校	平成 8年	町立あすなる幼稚園完成、老人福祉寮 「エンルム荘」完成
昭和25年	平宇以東がエリモ道立自然公園に指定	平成 9年	交流促進施設「アポイ山荘」完成・オープン 様似町クリーンセンター完成・稼働、 西町生活館完成
昭和27年	4月1日町制施行、様似村を様似町に改称 アポイ岳高山植物群落が国の特別天然 記念物に指定	平成10	岩手県野田村と友好町村締結
昭和28年	上水道工事完成		旭漁港完成、旭生活館完成、様似下水 終末処理場完成
昭和30年	様似町公民館開館、冬島漁港完成	平成11年	様似漁港海岸環境整備事業完了
昭和31年	様似町総合振興計画(第1次)開始		保健福祉センター完成、西様似地区 飲用水供給施設新設、大通第一団地 公営住宅完成
昭和34年	様似大橋完成	平成12年	「様似町男女共同参画条例」制定
昭和38年	初の灌漑ダムが様似川に完成		港町団地公営住宅完成
昭和41年	日高で最初の本格的郷土館完成	平成14年	アポイ山麓パークゴルフ場完成・オープン
昭和45年	様似小学校完成	平成17年	等澗院古文書などの歴史資料が国の 重要文化財に指定
昭和46年	3町(えりも・様似・浦河)共同の日高東部 消防組合発足	平成20年	日高昆布フォーラム初開催
	第1回アポイの火まつり開催		アポイ岳ジオパークが「日本ジオパーク」 に認定
昭和47年	スポーツセンター完成	平成23年	様似町総合計画(第8次)開始
昭和50年	様似治水ダム完成	平成27年	アポイ岳ジオパークが「ユネスコ世界ジオパーク」 に認定
	ヒメチャマダラセセリ(高山蝶)が国の 天然記念物に指定される		北海道様似町東京事務所開所
昭和51年	中央公民館完成	平成29年	特別養護老人ホーム「様似ソビラ荘」・老人 福祉寮「エンルム荘」移転新築・稼働
昭和52	鶴苦漁港完成	平成30年	様似山道が国指定史跡に指定
昭和53年	様似中学校校舎完成		第9回日本ジオパーク全国大会・アポイ岳 (北海道様似町)大会開催
昭和56年	アポイ岳周辺が日高山脈襟裳国定 公園に指定		蝦夷三官寺(等澗院)が北海道遺産に選定
昭和57年	町制施行30周年記念	令和元年	様似山道が「歴史の道百選」に選定
	畜産センター・漁村センター完成	令和 2年	北海道様似町東京事務所閉所
昭和58年	老人福祉センター完成、鶴苦小学校 新校舎完成		
	生涯スポーツの町宣言		
昭和59年	様似小学校ことばの教室完成		
昭和60年	山村広場総合グラウンド完成		

〔行政施策の重点事項〕

住民生活の安定と福祉の向上、産業支援を基本理念として、「町民と歩む 個性あふれる 元気なまちづくり」をテーマとして掲げ、財政健全化に取り組みつつ、各産業の活気がまちの活性を促し、豊かな自然環境を生かして交流の輪を広げ、小さくても住民同士が助け合いながら暮らしていけるまちの実現をめざす。

〔文化・観光〕

・アポイ岳ジオパーク(ユネスコ世界ジオパーク認定、日本ジオパーク認定)

アポイ岳は、日高山脈の南西に位置する標高810mの山で、山全体が地球深部の上部マントルに由来する「かんらん岩」でできており、そこに育つ高山植物群落は国の特別天然記念物に指定されている。この山をシンボルとし、町全体を「大地の公園」としてとらえ、様似町の貴重な大地の遺産、豊かな自然環境及び由緒ある歴史文化を学び楽しむことができるのがアポイ岳ジオパークである。

北海道で最初の官営道路である様似山道は国指定史跡に指定されており、蝦夷三官寺(等澗院)は北海道遺産に選定されている。また、等澗院の古文書など蝦夷三官寺歴史資料は、国の重要文化財に指定されている。

○アポイの火まつり

昔、アイヌの人々が鹿の豊漁を、火を焚いて神に祈ったという伝説にちなんだ例年8月第1土・日曜日に開催される様似最大のイベント。アポイ山麓での厳粛な採火式に始まり、エンルム岬に浮き上がる火文字、アポイ太鼓やねぶたパレードなど、多彩なイベントがまつりを盛り上げる。

○生涯スポーツ「テニポン」

「だれでも、どこでも、気軽に」を取り入れ、テニスと卓球をミックスした「テニポン」を様似町がオリジナルスポーツとして開発。町民テニポンの集いや町内大会、全道テニポン選手権大会などが開催され、道内はもとより沖縄県石垣島まで愛好者の輪は大きく広がっている。

〔産業・経済〕

農林水産業の一次産業が主体。

主産業である漁業の歴史は古く、江戸時代から様似の昆布やサケは重要な産物となっており、現在も昆布やサケ、スケトウダラ、マス、真ツブ、ウニ、タコ、カレイ、ふのりなど豊富な水産資源に恵まれている。また、サケやマツカワ、ハタハタのふ化事業にも取り組み、「つくり育てる漁業」を積極的に推進している。

農業では、肥料コストの低減や減農薬栽培を促進し、新規参入者等の就農促進を図っており、農業所得の安定を図るため導入された「いちご」は専門化が増え、基幹作物へと成長している。

〔主な公共施設〕

中央公民館、保健福祉センター「きらく」、小学校、中学校、幼児センター、スポーツセンター、観音山スポーツ公園、生涯スポーツ研修センター、図書館、郷土館、クリーンセンター、上水道、簡易水道、下水処理施設、アポイ岳ビジターセンター、アポイ岳調査研究支援センター

えりも町 えりもちょう



役場所在地 北海道幌泉郡えりも町字本町206番地
 郵便番号 058-0292
 電話番号 01466-2-2111
 F A X 番号 01466-2-3367
 ホームページ <http://www.town.erimo.lg.jp/>

〔町名の由来〕

アイヌ語で「突き出た頭」という意味の「エンルム」が転訛して「エリモ」になったと考えられている。

〔町章の由来〕

えりも町の「え」を現代的にデザインしたもので、上部の半円は波、すなわち海を描き本町の基幹産業である水産業を象徴し、矢印は酪肉農業と、えりも岬が太平洋に深く突き出しているえりも町の地形と町勢の躍進を表し、さらに円形で町民の協和と団結を表現している。

〔地勢〕

えりも町は北海道の中央部最南端にあり、不等辺三角形を成して太平洋に突き出している。西側は様似町に、東側は広尾町に接し、北東部から南方、襟裳岬へと日高山脈がつづく。海岸線は58.145キロメートルあまり、断崖や岩礁、波荒い海の景観は雄壮であり、内陸部にも美しい景勝地が多い。

〔歴史〕

今から400年前、この地に和人が往来するようになり、幌泉場所と呼び交易を始めた。明治に入った頃、現在のえりも町を開拓しようと多くの人々が来てにぎわい、明治13年に戸長役場が設置された。同39年に2級町村制度が施行されたことにより「幌泉村」が誕生し、その後昭和34年に町政を施行し「幌泉町」となり、同45年に町名を現在の「えりも町」に改称した。

えりも町は、風速10メートル以上の風の吹く日が年間260日以上もある日本屈指の強風地帯で「風のまち」とも呼ばれている。容赦なく吹き付ける強風と開拓時の森林伐採によって、赤土や土砂が飛散し、えりもの地から緑が消え「えりも砂漠」と呼ばれた時期もあった。この状況を打開すべく昭和28年に自然再生プロジェクトとして「緑化事業」をスタートさせ、種子と肥料をまいた上に、海岸に打ち上げられた雑海藻を覆う方法「えりも式緑化工法」で事業は成功した。

海と山が共存する恵まれた環境のもとで、「輝く海と大地を次世代へつなげるまちづくり」をテーマに、風のまちとして未来に受け継ぐ施策を進めている。

〔町政のあゆみ〕

明治13年	幌泉郡9か村に5戸長役場が設置	平成 3年	清掃センター、老人福祉寮が完成
明治22年	襟裳灯台が点灯(本道唯一の1等灯台)	平成 4年	郷土資料館「ほろいずみ」が完成
明治39年	戸長役場を廃止し幌泉村役場を設置	平成 6年	特別養護老人ホーム「やまと苑」が開所、 「えりも町老人福祉計画」を策定
昭和34年	町政を施行し「幌泉町」になる	平成 7年	役場新庁舎・保健センターが完成
昭和41年	町立国民健康保険診療所を開設	平成 8年	第4期総合計画を策定
昭和45年	町名を「幌泉町」から「えりも町」に改称	平成 9年	町立国民健康保険診療所を移転、百人浜 パークゴルフ場完成、襟裳岬「風の館」完成
昭和46年	日高東部3町で消防組合を設立	平成12年	町開基120年記念式典、えりも小学校移転、 同小学校エコスクール事業風力発電施設が 完成
昭和47年	町総合開発計画を策定	平成13年	下水道事業供用開始(本町処理区)
昭和49年	温水プールを開館	平成15年	中央保育所が完成
昭和50年	えりも港新港が完成	平成16年	廃棄物埋立処分場「クリーンセンター」が完成
昭和52年	新総合開発計画を策定	平成17年	北海道栽培漁業えりもセンターが完成
昭和53年	陸上競技場が完成	平成18年	第5期総合計画を策定
昭和55年	町営公衆浴場が営業開始	平成22年	町開基130年記念式典、高齢者福祉寮を移転
昭和55年	開基100年記念式典	平成24年	町交流館「ひなた」が完成、放課後児童クラブ を開設
昭和56年	町民憲章制定、町民体育館、水産の館が完成	平成27年	地方創生総合戦略、人口ビジョン策定
昭和59年	東洋小学校新校舎が完成	平成28年	森と湖の里ふれ愛館完成
昭和61年	第3期総合計画を策定、日高東部消防組合えりも支署が完成	平成29年	第6期総合計画基本構想を策定
昭和62年	本町商店街近代化事業が完成	平成30年	庶野放課後児童クラブを開設
昭和63年	町内全域に防災行政無線屋外放送施設完成		
平成 2年	百人浜オートキャンプ場が完成、町開基110年記念式典		

〔行政施策の重点事項〕

平成28年度に新たなまちづくりの指針となる第6次えりも町総合計画基本構想を策定し、基本理念を「輝く海と大地を次世代へつなげるまちづくり」と定め、今後、人口減少と高齢化が進む中、本町が発展するためには、海と大地がもたらす豊富な資源を最大限に生かすまちづくりに取り組むとともに、その営みを引き継ぎ、えりも町の未来を担う人材を育てるため、基本理念の下に5つの目標を設定し「子どもから高齢者まで誰もが笑顔で住み続けたいと思えるまち」の実現を目指す。

○まちづくりの5つの目標

- 1 活力ある地場産業をはぐくむまちづくり(産業振興)
- 2 健康で安心して暮らせるまちづくり(保健、福祉、医療)
- 3 自然豊かで安全・安心なまちづくり(社会基盤、環境衛生、防災)
- 4 人を大切にし、人にやさしいまちづくり(教育、生涯学習、人材育成)
- 5 みんなが参画して進めるまちづくり(住民参加の行政運営)

〔文化・観光〕

風速10メートル以上の風の吹く日が年間260日以上もある日本屈指の強風地帯に、平成9年に開館した襟裳岬「風の館」をはじめ、日高山脈襟裳国定公園内唯一の自然湖で、ハート形をした湖「豊似湖」、太平洋が見渡せる高台の上に多くのエゾヤマザクラが多数植えられている「庶野さくら公園」など、恵まれた自然環境を利用した観光地が数多くある。

また、毎年お盆に開催され、約1,500発もの花火が夜空を彩る町最大のイベント「えりもの灯台まつり」や、山肌が色づく10月に開催され、特産のサケ鍋やえりも短角牛のバーベキューを味わいながら、サケのつかみどりなどのユニークな催し物が存分に楽しめる「海と山の幸フェスティバル」など、海と山、風を感じられる、自然を舞台にしたイベントが数多く開催されている。

〔産業・経済〕

○水産業

活力ある沿岸漁業を振興するため昆布資源の維持増大と安定した生産のために漁場整備を行っている。また、資源増大のためのエゾボラの繁殖生態等の調査やハタハタ、マガレイ等の種苗生産及び放流を実施している。

○観光業

日高山脈襟裳国定公園の襟裳岬は、風と霧と怒涛が四季を織りなす風光明媚な名勝で、全国屈指の強風地帯でもあり、その風を逆手にとってオープンした「風の館」は、学術的にも観光資源としても貴重な施設となっている。また、ハート形の湖「豊似湖」を活用した新たな観光事業や、人と人のふれあいを大切にした自然体験事業の推進など、四季を通じた魅力ある観光地づくりを目指している。

○商工業

町民公募により名づけられた「スマイルタウン」を中心に、経済活動や雇用面で大きな役割を果たしており、地元の人たちや観光客など、消費者が求めるニーズに合った変化にすばやく対応できる取り組みを進めている。また、地元の水産物を原料とした製品の販売など、地場産品の開発や販売を積極的に推進している。

○農林業

半世紀を超えた「えりも岬の国有林緑化事業」は、自然環境保全、地球温暖化抑止効果など重要な役割を担っていることから、この緑を絶やさぬよう、木本緑化や植栽を進め、えりもの森づくりを次代に引き継ぐ事業を展開している。また、えりも短角牛、競走馬の飼育など畜産業の促進を図っている。

〔主な公共施設〕

福祉センター、診療所、風の館、高齢者センター、清掃センター、クリーンセンター、浄化センター
浄水場(3)、えりも栽培センター、町民体育館、郷土資料館、水産の館、スポーツ公園
特別養護老人ホーム、小学校(5)、中学校、高等学校、保育所(3)、キャンプ場、パークゴルフ場
高齢者福祉寮、生活館等(15)、図書室、保健センター、交流館、児童クラブ(2)、ふれ愛館

新ひだか町 しんひだかちょう



役場所在地 北海道日高郡新ひだか町静内御幸町3丁目2番50号
郵便番号 056-8650
電話番号 0146-43-2111
FAX番号 0146-43-3900
ホームページ <http://www.shinhidaka-hokkaido.jp/>

〔町名の由来〕

静内町・三石町合併協議会において、新町名称候補7点の中から1次投票により3点を選定し、更に2次投票により得票数が多かった「新ひだか町」を新町名称に決定したものである。

〔町章の由来〕

北海道の地形「ひし形」(青色)と新ひだか町の「ひ」(緑色)を図案化し、中央の赤い丸で町・町民を表現。全体で「北海道・新ひだか町・町民」を表現したものである。

〔地勢〕

日高振興局管内の中央に位置する当町は、北西に新冠町、南東に浦河町と隣接し、南西は太平洋に面し、北東は日高山脈を抱える。総面積は、1,147.55km²あり、その83.9%が森林のうち67.7%を国有林が占めている。地形は、静内川、有良川、捫別川、布辻川、三石川、鳧舞川の流域地帯を除くとほとんどが丘陵地帯となっており、人口は下流部や太平洋岸沿いに集中している。

〔歴史〕

旧静内町は、温暖な気候となだらかで肥沃な大地や川があることから、太古の昔よりアイヌの人びとが生活を営んでいた。明治期には、徳島藩からの開拓団が初めて入植。たゆまぬ農業開拓の一方で、この時期から既に御料牧場の地にも選ばれていた。昭和初期には、初めての地方競馬も開催。30年代後半期には、静内川の電源開発と共に、産業・経済活動が一段と活気を帯び、人口も飛躍的に増加した。以来、日高地域の経済・産業・文化の中心地として着実に発展した。

旧三石町は、今から400年以上もの昔より昆布やタラの漁場として栄えていた。明治8年には、日高管内で最も早く姨布村(旧三石市街)に戸長役場が置かれた。これを契機に、兵庫、岩手、福井からの入植者が開拓の鍬を下ろし農業を、また、新潟からの入植者が漁場を開拓した。昭和26年に町としての歴史をスタートさせてからは、第一次産業への振興策を積極的に展開。昆布、米、肉牛などの生産品をブランド化させ、グルメ王国北海道の一翼を担う生産地として栄えた。

この長い歴史を刻んできた2つの町は、平成18年3月31日に合併、「新ひだか町」が誕生した。

〔町政のあゆみ〕

平成18年	静内町・三石町が合併し、新ひだか町となる みついし昆布温泉「蔵三」完成	平成23年	町観光キャッチフレーズが「風かおる優駿桜国 (ゆうしゅんおうこく)新ひだか」に決定
平成19年	地域交流センターピュアプラザ完成 ウオッカが牝馬としては64年ぶりとなる日本ダービー制覇		三石地区の延出、鳧舞、本桐、歌笛、川上の各小学校が閉校し、三石小学校に統合
平成20年	三石幼稚園閉園 生活支援ハウスきずな開所 第1次町総合計画策定	平成24年	第1回二十間道路ハーフマラソン大会開催 春立小学校閉校 砂入り人工芝テニスコート完成
平成21年	川合小学校閉校		静内・三石間の市外局番ダイヤルが不要に
平成22年	新ひだか町誕生5年記念各事業開催	平成25年	日高中部消防組合消防署庁舎完成 静内温泉リニューアルオープン
		平成27年	図書館・博物館オープン
		平成28年	新ひだか町誕生10年記念各事業開催
		平成29年	新ひだか町総合町民センターオープン
		平成30年	第2次町総合計画策定

〔行政施策の重点事項〕

○安心・安全のまちづくり ～医療と介護の充実策、防災・減災対策

この町を将来にわたって活力ある町として維持・発展させていくため、何よりもこの町に住む人々が暮らしに安心と安全を感じ、心から住み良いと思える生活環境を整える。

○希望の持てるまちづくり ～産業振興策と交流人口の拡大策

町民が将来に夢や希望を持ち、充実した日々を送るためには、町民生活が豊かでなければならず、当町のように第1次産業を基幹産業とする地域においては、農林水産業の振興を柱としながら、その効果を地域経済全般へと波及させるとともに、時代の流れを的確に捉えた「稼ぐ地域」を形成していく。

○心豊かに暮らせるまちづくり ～人づくり、文化・スポーツ活動の推進

将来にわたって、心豊かで健やかな生活を送るためには、町民一人ひとりが他人を思いやる人間性を育み、生涯を通して学び、芸術や文化、スポーツなどに親しむことにより、生きがいを持ち、実りある人生を創ることができる環境を整える。

〔文化・観光〕

○文化

当町は文化活動が盛んで、文化系のサークルが登録しているだけでも100以上あり、それぞれが熱心に活動を続けている。こうした生涯学習へのニーズの高まりに対応して、町でも学習環境の整備に努め、公民館などの公共施設を整えて、豊かな学習活動への環境づくりをサポートしている。図書館を利用する町民が多いのも、文化的な特徴のひとつであり、図書等の貸出件数が年々高まりを見せ、人びとが読書をする文化的環境を日常的に楽しんでいることがうかがえる。また、当町は、北海道の中でも歴史の深いまちであり、アイヌ民族の文化・伝統を伝える民俗資料館や町の開拓の歴史を知ることができる博物館などを通して、まちの歴史を伝える取組も継続して行っている。

○観光

自然景観に恵まれた当町は、時代のニーズに応える観光資源の宝庫であり、新たな地域産業の一環として観光開発に取り組んでいる。

春、「静内二十間道路桜並木」では、直線7キロメートルにも及ぶ道路の両側にエゾヤマザクラが咲き誇り、毎年5月の開花シーズンには「しずない桜まつり」が開催され、10万人以上の観光客で賑わう。夏は、太平洋が眼下に広がる全面芝生のオートキャンプ場や磯遊びができるみついしふれあいビーチなど、魅力がいっぱいの「三石海浜公園」に、家族連れをはじめとする多くの人々が遊びに訪れる。更に同エリアには、みついし昆布温泉「蔵三(くらぞう)」があり、町民や観光客の憩いの場となっている。このほか、シャクシャイン像のある真歌公園、「みついし蓬莱山まつり」が行われる蓬莱山公園などがある。また、シベチャリの橋(歩道橋)が結ぶ静内川両岸の公園には、パークゴルフ場やテニスコートなどの各種スポーツ施設、冬には、オオワシやオジロワシ、白鳥など大型の渡り鳥が飛来し、白鳥と触れ合える白鳥広場があり、町民はもちろんのこと観光客にも憩いとやすらぎの場として利用されている。

〔産業・経済〕

当町の産業別15歳以上就業者数は、全体の20.9%が第1次産業、13.8%が第2次産業、64.2%が第3次産業という形態になっている。(平成27年国勢調査より)

恵まれた自然環境を生かした農林水産業のうち農業においては、代表的なものとして軽種馬産業があげられる。全国の約79%の競走馬を生産している日高管内にあって、当町からも、オグリキャップ、トウショウボーイ、ウオッカ、ロードカナロアなどの歴史的な名馬を輩出しており「競走馬のふるさと」としての伝統を誇っている。また和牛生産においても、品質の高さや安全性において消費者から高い評価を得ており、クオリティの高い「みついし牛ブランド」として生産している。このほか、地元産米においては「万馬券」や「トキノミノル」のユニークなネーミングで販売している。また、地域特産品としてミニトマトや花きなどハウス栽培に積極的に取り組み、その出荷量は年々増加傾向にある。ミニトマトは「太陽の瞳」、花きは「みついし花だより」のブランド名で全国へ出荷している。

一方漁業では、資源確保のため捕る漁業から育てる漁業への移行をめざし、ウニの種苗放流やハタハタ、クロソイなどの栽培漁業及び昆布の漁場造成などにも力を入れて、近年その成果が見られるようになった。また、全国的にも有名で高級料亭からも引き合いが絶えない「日高昆布」は、太平洋と太陽の恵みをたっぷり含み、昆布の最高峰として消費者からも愛され続け、地元水産業を支えてきた自慢の特産品となっている。

さらに、町の約84%を占める豊富な森林資源を活用した木材加工を中心とする第2次産業も、わがまちの発展を支えてきた。町内には道内有数の工場をはじめとする木材、木製品工場があり、ベニヤ、合板、チップ類を出荷している。

商品販売額でも道内有数の規模を誇り、日高地区の拠点商業都市として大きく成長し、週末には町外からも多くの買い物客が訪れ賑わっている。

『新ひだか町』は、平成18年3月31日にそれまでの「静内町」と「三石町」が合併して新たに誕生した町です。わがまち新ひだか町は、北海道日高振興局管内の中央に位置し、峰々が連なる日高山脈を背に、雄大な太平洋を望む温暖で緑あふれる自然に恵まれたまちであると共に、日高地方の行政、産業、経済、そして文化の中核都市です。

【新ひだか町役場 静内庁舎の位置】 新ひだか町静内御幸町3丁目2番50号

経度:142度22分07秒 緯度: 42度20分29秒

【新ひだか町役場 三石庁舎の位置】 新ひだか町三石本町212番地

経度:142度33分37秒 緯度: 42度14分54秒

〔主な公共施設〕

町立保育所(2)、静内子育て支援センター、児童館(4)、児童養育相談センター、老人いこいの家、地域保育所、静内温泉、保健福祉センター、町立病院(2)、介護老人保健施設まきば、特別養護老人ホーム(2)、ケアハウスのぞみ デイサービスセンター(3)、地域交流センターピュアプラザ、三石海浜公園オートキャンプ場、道の駅「みついし」、みついし昆布温泉「蔵三」、静内終末処理場、三石浄化センター、基幹集落センター、農業実験センター、和牛センター、水産加工センター、高齢者共同生活施設やまびこ、学校給食センター、公民館・コミュニティーセンター、総合町民センター、アイヌ民俗資料館、図書館・博物館、体育館(4)、静内温水プール、武道館、パークゴルフ場(2)、ライディングヒルズ静内、野球場(2)、小学校(6)、中学校(3)